

小豆沢体育館建替え計画 地域コミュニティの拠点となる健康スポーツセンターの設計

早田倫人



写真-1 外観

1.計画の背景

1-1.スポーツ施設の現状

昭和40年代、特に東京オリンピック以降スポーツ愛好家の増加や意識の高まりと共に（経済の高度成長にも支えられ）地方自治体は地域のスポーツの場として、体育館づくりを力をついた。東京区部においても同様な傾向がみられ、各地域に体育館が建設された。当時の体育館は競技中心型の施設づくりであり、区の中心的な役割をもつスポーツ施設であった。その役割は近年建設されたスポーツ施設に置換され、地域のスポーツ施設として位置づけられているものの、現在のスポーツ指向の多様化・個性化に対応できていない状況である。またその機能も十分でなく老朽化も激しく建替えの時期を迎えている。（図-1,2）

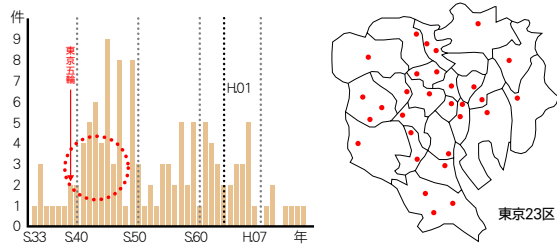


図-1 年次別設立件数（東京23区）

図-2 昭和40年代初期に建設されたスポーツ施設

1-2.スポーツ指向の多様化・個性化

近年、少子高齢化・自由時間の増大・健康指向等の社会情勢の中で、「競技指向」から「健康指向」、「団体よりも個人としての利用」、「趣味・娯楽・レクリエーションの場として」、「交流の場として」等のスポーツ指向が多様化・個性化し日常生活の中で気軽にスポーツを行う人が増加しており、そのためのスペースやサービスが求められている。

1-3.地域保健福祉

少子高齢化が急速に進むとともに、ライフスタイルも多様化し人々の暮らしを支える地域のあり方が変化してきている。こうした中で、これまで以上に健康増進や要介護化の予防の取り組みの必要性が高まり、要介護度の重度化を少しでも防ぎ、軽減することが求められる。また近年では、介護度が低いデイサービスセンターが在宅福祉サービス施設に付属するのではなく、区民センターや小学校などと一体となっているものもあり、高齢者が一方的にサービスの提供を受けるだけの施設ではなく地域住民との双方向とのシステムをつくらうとする提案がみられる。

2.計画の目的

本計画は、競技型であり、その役割を失った板橋区立小豆沢体育館を地域生活者の多様な活動のスペースとして、健康スポーツセンターとして建替えを行い、地域コミュニティの場を目指すものとする。

3.計画敷地 板橋区立小豆沢体育館



写真-2 公園メインゲートから既存体育館を見る

小豆沢体育館は板橋区総合体育館として昭和43年に建設され、区の中心的なスポーツ施設として役割を担ってきたが、東板橋体育館が新たに区の中心的なスポーツ施設としてつくられ、上板橋体育館、赤塚体育館などがつくられると地域体育館として役割を担うようになった。しかし、区内で一番の規模を有しているにもかかわらず施設の老朽化やプログラム、施設内容が魅力的でないため利用者が減少している状況である。（図-3,4,5,6）

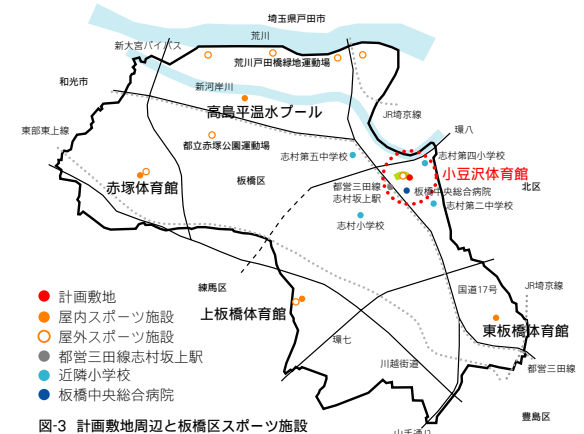


図-3 計画敷地周辺と板橋区スポーツ施設

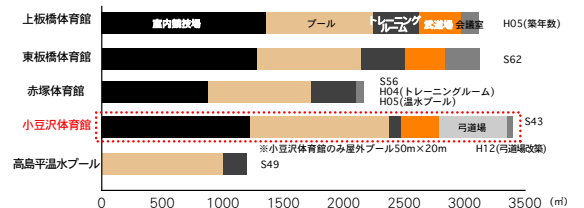


図-4 板橋区立体育館主要諸室の規模と築年数

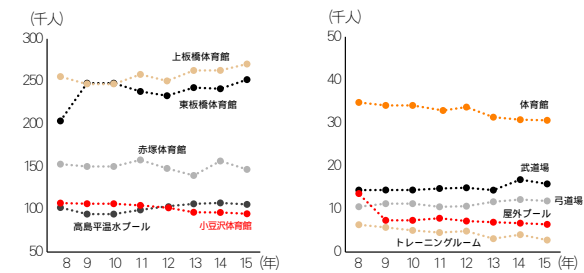


図-5 板橋区立体育館利用人数

図-6 小豆沢体育館各機能利用人数

小豆沢体育館は都営三田線志村坂上駅から徒歩5分、周辺には国道17号線、環状八号線が走っている。閑静な住宅街と商業地の狭間にあり、緑豊かな板橋区立小豆沢公園内に位置する。公園内に建てられたにもかかわらず公園との関係はほとんどなく、街と公園とを切り裂いたイメージを受ける。小豆沢公園内には、小豆沢体育館の分館として武道場、弓道場があり、さらにグラウンド、テニスコート、屋外幼児プール、相撲場、散歩道などがあり地域の憩いの

場として利用されている。現在グラウンドは整備中であり、屋外幼児プールは閉鎖されている。また、計画敷地は公園より8～11m低く、東側の前面道路は8mの起伏があり谷間のような地形をしている。(図-7)



図-7 計画敷地周辺図

4.計画の概要

4-1.気軽に立ち寄り個人利用に対応した地域スポーツ施設

健康維持・健康増進のためのスポーツ・レクリエーションは人により個人差があるため、的確な運動指導が受けられる個人に対応したものとする。また、スポーツクラブの各々の団体に体験参加できる場を設けるように促し、運動の機会を広げるものとする。(図-8)

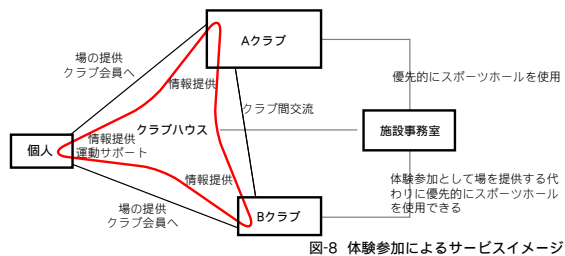


図-8 体験参加によるサービスイメージ

4-2.地域福祉への対応と社会交流の場

デイサービスの機能訓練やレクリエーションなど「動の活動」をスポーツに、お茶会でのおしゃべり、手工芸、読書、書道などの「静の活動」を地域コミュニティとして読み取り社会交流の場となる施設とし、高齢者のみならず地域生活者が住み慣れた地域での多様なスペースとして使用できるものとする。また、健康のためのスポーツ習慣の継続、スポーツ人口の増加のみならず、精神面の健康のためには交友関係が必要不可欠であり、そのためのコミュニケーションの場が展開する施設を目指す。(図-9)

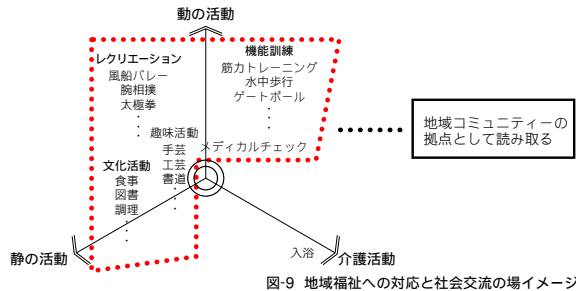


図-9 地域福祉への対応と社会交流の場イメージ

4-3.健康サポートセンター

生活習慣病や高齢化に伴う健康管理の一次予防、高齢者の介護相談としての的確な指導・情報提供・体験・学習のできる施設とする。

4-4.地域との連携

区の体育指導者派遣制度、スポーツ施設、保健福祉センター、地域スポーツクラブ、ボランティア団体、近隣の小中学校、板橋中央総合病院と連携をとり、的確なメディカルチェックや様々なイベントなどを行うものとし、地域活性化に貢献するものとする。(図-10)

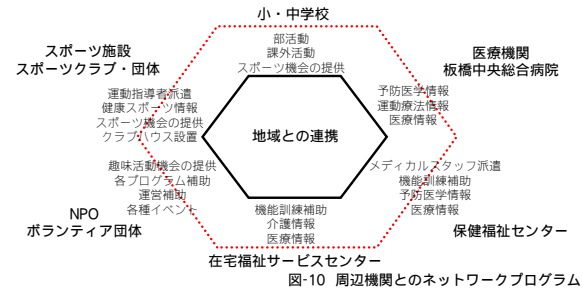


図-10 周辺機関とのネットワークプログラム

4-5.小豆沢公園との一体化

公園とのアクセスを明確にし、公園と一体化したランドスケープデザインとする。公園内の老朽化が激しい武道場と閉鎖中の屋外幼児プールを計画敷地内に取り込み、その跡地は公園として整備する。さらに、公園内の散歩道を計画敷地に取り込み、回遊性を持たせ、公園との一体化を図るものとする。また、基本的にスポーツホールと武道場は時間帯やホールを分割して半面利用などにより個人に対応し、他は個人利用を主としたものとする。(図-11)

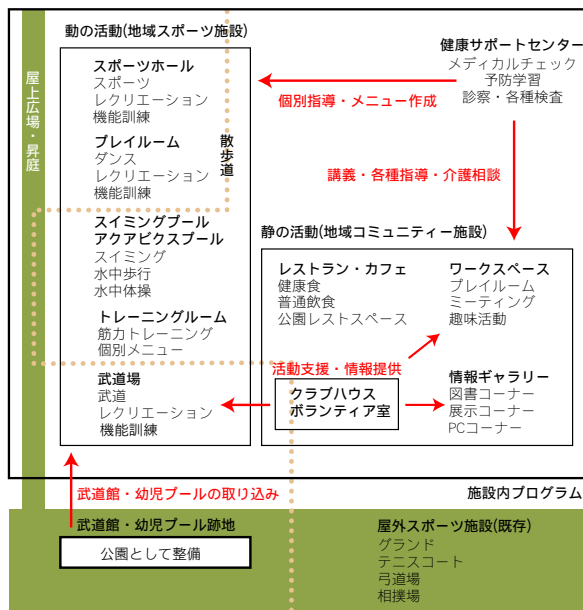


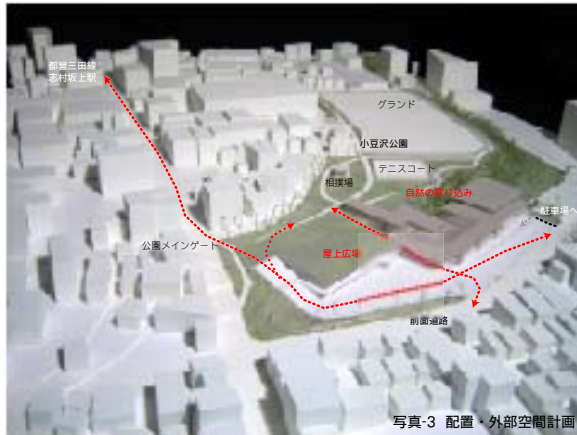
図-11 本計画と小豆沢公園プログラム

5.設計の概要

5-1.配置・外部空間計画

公園のメインゲートと前面道路とを繋ぐように公園・駅・街へと通り抜け可能な新たなパスを仕掛け、広場を設ける。公園と前面道路との段差を利用し、公園側はできるだけ公園の自然を触らないように、自然を建物内に風景として取り込む。コンクリートの擁壁で押さえられている部分は屋内プールのボリュームを活かし屋上広場として公園と繋げ、公園と前面道路からの視界を確保する。また、北側の住宅に配慮してセットバックし、車のアクセスに対応さ

せ、公園の樹木と繋がるように植林する。広場は地域住民のたまり場、屋外ステージや青空市場などのイベントとしても使用される。(写真-3)



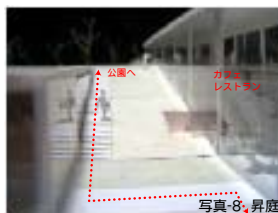
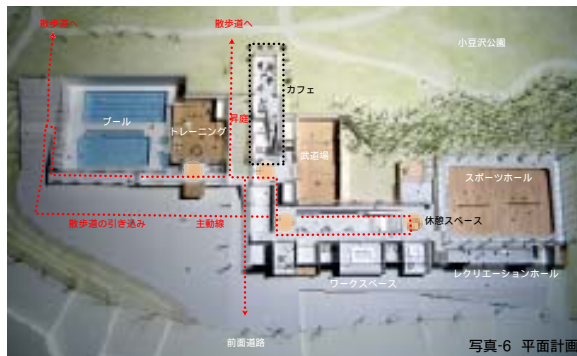
5-2.平面計画

外部を囲むように動の空間と静の空間が構成し、外部と吹き抜けて各空間を分けることで、透明性のある壁ができる。視線が抜け外部活動が内部に、内部活動が外部に様々な活動が重なり内外一体となった風景を演出し、自然環境を取り込んだ豊かな空間を創り出す。(写真-4, 5)



公園内散歩道を広場、施設内に取り込み主動線とし回遊性を持たせる。散歩道を歩くと施設内、公園内の全ての活動を伺える仕掛けとなっている。

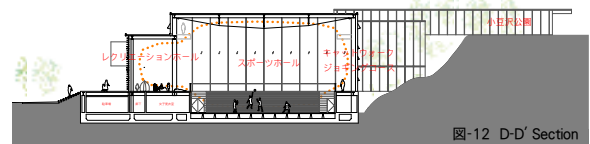
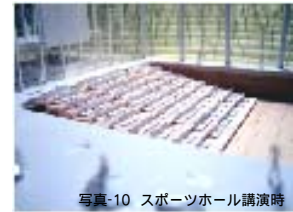
カフェ・レストランは前面道路、公園の両方から直接アクセスでき、施設、公園利用者のみならず、地域住民のたまり場となる。また、高齢者に配慮し体を休める場所、あるいは数人で話ができる場所、交流の場所をステーションとして各機能の活動が伺えるように配置し、空間に連続性をもたせる構成とした。(写真-6, 7, 8)



5-3.断面計画

2階レベルの通路を外と吹き抜けに挟まれるように配置し、各機能を付属させることにより、視線が通り、視覚的に外の風景と内の活動が伺える構成とする。主動線上のアトリウムの階段は、本を読むツールとして機能する。

敷地の起伏を活用し、北側のG.Lにスポーツホールを配置することで、基準階より半地下化し、断面的に空間を分けることにより、基準階と壁なしの一体感のある空間を演出する。レクリエーションホールからスポーツホールにキャットウォークとしてジョギングコースが伸び、歩行訓練やスポーツ観戦に使用される。スポーツホールは壁面収納の電動可動式観客席を講演会やイベントなどに対応し多目的の用途に対応する。(写真-9, 10 図-12)



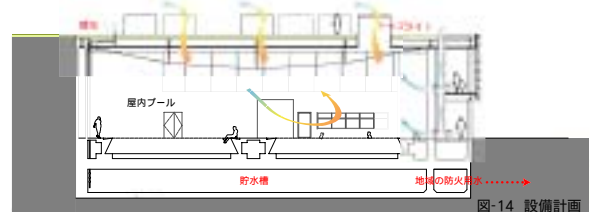
5-4.構造計画

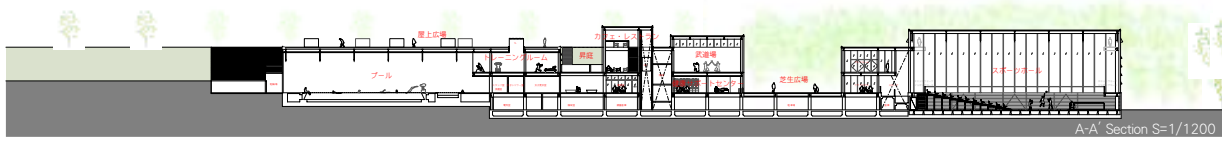
主構造はS造ラーメン構法とし、公園と接する部分はSRC造とする。内外部が連続する空間を演出するため、大スパンを有するスポーツホール、屋内プールはBSS構法を用い軽量化、薄肉化する。(写真-11 図-13)



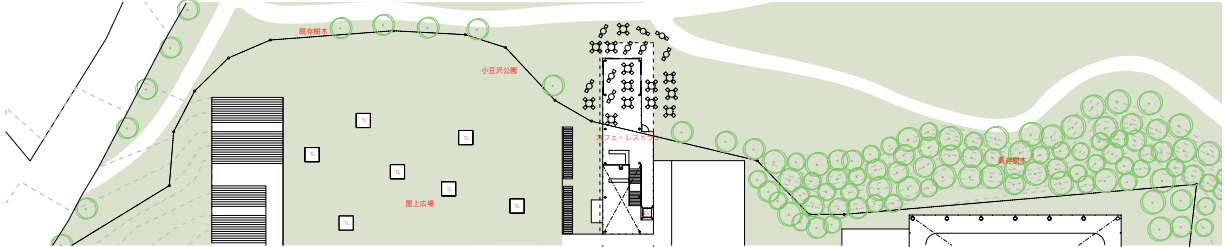
5-5.設備計画

屋内プール、スポーツホール、アトリウムの大空間はダブルスキンとし熱効率を上げ、中間期は外気を取り入れ自然換気を行い、エネルギー消費量を減少させ環境に配慮する。屋内プールは屋根スラブが公園と繋がっているためトップライトを設け煙突効果を利用し自然換気を行い、夜間にはライトアップさせ地域の安全に貢献するものとする。その他の空間はロールスクリーンやブラインドなどを用いて簡易エアフローウインドウ方式とする。また雨水を貯水し屋上広場への散水、防火用水として活用する。(図-14, 15)

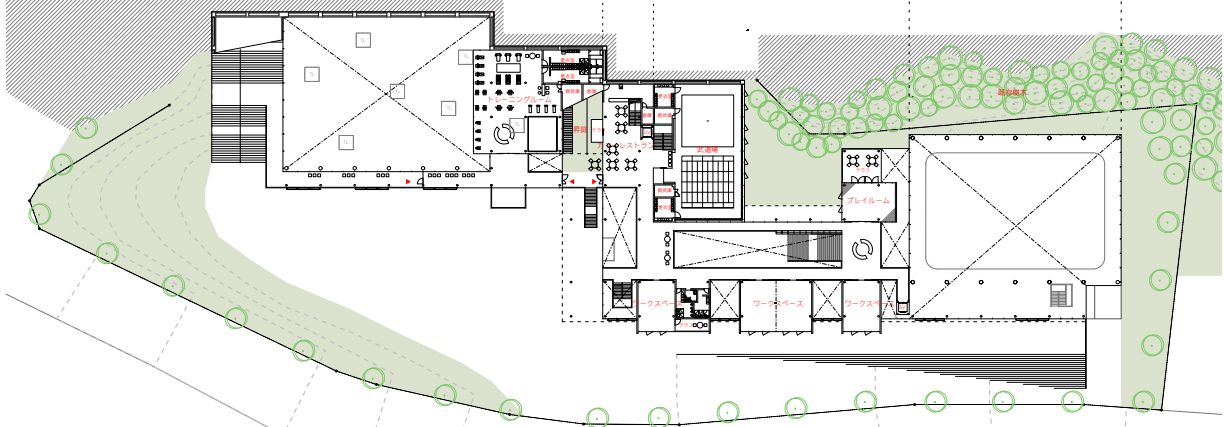




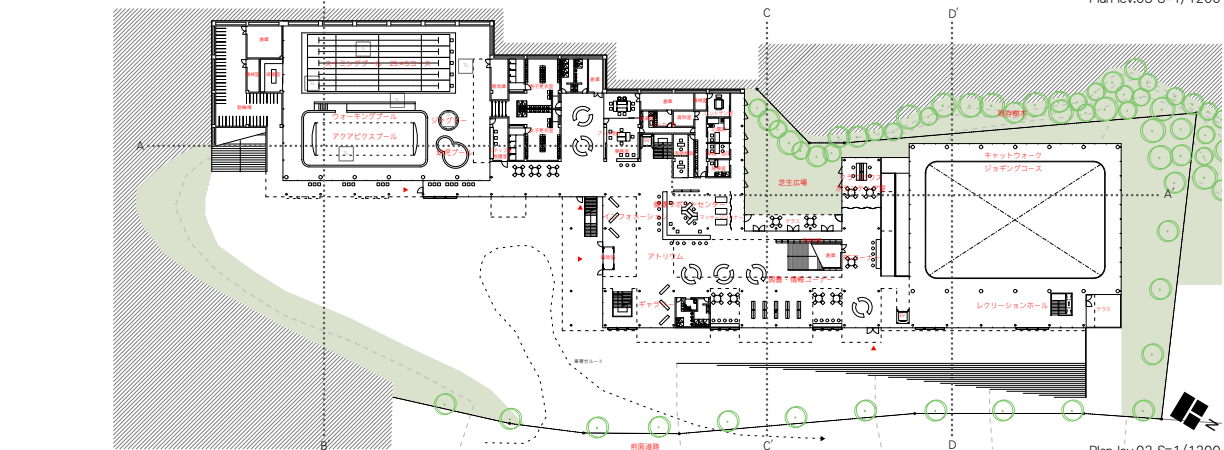
A-A Section S=1/1200



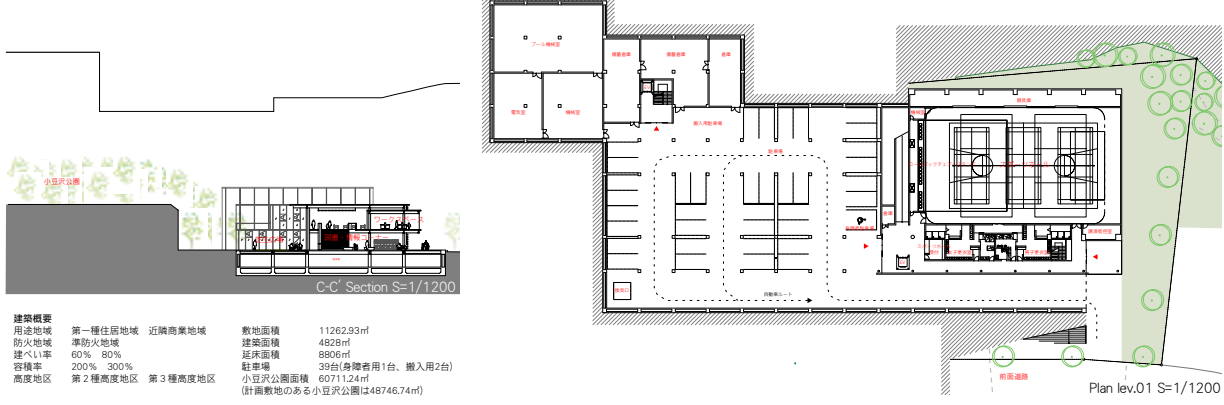
Plan lev.04 S=1/1200



Plan lev.03 S=1/1200



Plan lev.02 S=1/1200



Plan lev.01 S=1/1200

建築概要

用途地域	第一種住居地域 近隣商業地域	敷地面積	11262.93㎡
防火地域	準防火地域	建築面積	4828㎡
建ぺい率	60%・80%	延床面積	8806㎡
容積率	200%・300%	駐車場	39台(身障者用1台、搬入用2台)
高度地区	第2種高度地区 第3種高度地区	小豆沢公園面積	6071.24㎡
		(計画敷地のある小豆沢公園は48746.74㎡)	